

## 時間地理学の展開とマーケティング論への応用の可能性

山 田 晴 通

## 要 旨

時間地理学の成果からマーケティング論に有益と思われるものを選んで代表的な業績とともに紹介し、応用への手掛りを整理した。時間地理学的な地域計画手法は、その限界を認識した上で、行動モデルとして応用できる可能性がある。また、生活時間構造に注目したライフ・スタイル記述の手法として時間地理学的手法を用いることも可能であろう。さらに、時間地理学の表現技法を用いて、説明や発想に新たな視点を持ち込むことも有益と思われる。

## 目次

はじめに：本稿の発想と課題

## I. 時間地理学の展開

## 1. 時間地理学の提起と基本的な諸概念：

ヘーゲルストランド「地域科学においてヒトはどうなっているのか？」

## 2. 地域計画への応用

レントープ「個人的活動計画の時間地理学的シミュレーション・モデル」

## 3. 時間地理学の分裂・変貌と、わが国における評価・受容の状況：

柳谷圭司「時間地理学研究の動向」

## 4. 制約条件下の生活実態の描写：

バーム「非大都市地域の女性たち：時間収支研究」

## II. マーケティング論への応用の可能性

## 1. 地域計画手法としての限界と可能性

## 2. ライフ・スタイルの記述

## 3. 表現技法としての応用

おわりに：「時間」論の発想

## はじめに：本稿の発想と課題

本稿の目的は、(人文)地理学の分野において一定の成果を上げている「時間地理学」という新しい研究の流れの中から、マーケティング論という異分野の研究の進展に寄与し得るアイデアを拾い上げることにある。時間地理学研究の視点が、マーケティング論に貢献し得ることがあるとすれば、それは何か。その間に一応の答案を提出しようというのが、本稿の課題である。

しかし、実はこうした課題のあり方は、前半で時間地理学の主な業績を紹介し、それを基に後半でマーケティング論への応用を考える、という本稿の構成に従って後から設定されたものである。筆者が本稿の概要を発想した過程における課題のあり方は、これとは少々違っていた。

実際の発想の過程で筆者が問題にしたのは、人文地理学の基礎知識を持つ者として最近のマーケティング分野の研究に接していると、議論における表現手段こそ違うものの、時間地理学の枠組や問題意識に近いものを感じることがしばしばある、という経験であった。特に、いわゆるタイム・スライド・ビジネス論やライフ・スタイル論などで、店舗の営業時間や消費者の生活時間が取り上げられる局面においてはその感を強く持ったし、情報ネットワーク化を巡る議論においては「結合の制約」の概念によっても整理できるのではないかと思われる話題に接することが多かったのである。そこで、ごく素朴に、時間地理学の成果からマーケティング論に発言することができないだろうか、と考えたわけである。

いずれにせよ、本稿の試みが成功しているかどうかは読者の批評を待つよりないが、現実の社会における情報化・サービス化・24時間化が進行していくのに伴ってマーケティング論への「時間」概念の取り込みは一層重要な課題になってくるものと思われる。その際、究極的にはマーケティング論独自の時間論が目指されるべきだとしても、当面は隣接諸学の成果をマーケティングへ生かす

努力も必要なことはいうまでもない。本稿はこのような立場から、マーケティング論における「時間」論を改めて提起しようとするものである。

## I. 時間地理学の展開

1960年代にその起源を持ち、1970年代以降、広く世界的に知られるようになった時間地理学 (Time Geography) が欧米の学界において展開してきた経過については、邦文論文を含めて既に数多くの展望・紹介が提出されている<sup>1)</sup>。いわゆる計量革命以降の地理学の様々な潮流 (人文主義やラディカルなど) が、相互にどのような位置関係にあり、どのように影響し合っているかは議論の余地が大きく、これを整理する作業は困難なものとなっている。

本稿前半部の目的は、詳細な学史を追うことではなく、時間地理学のおおよその流れを把握することにある。そこで以下では、時間地理学の成立に重要な役割を演じた論文や、時間地理学の展開過程において典型的なタイプを見せるものと考えられる論文など、3篇の英文論文を紹介し、前2篇と後1篇の間に邦文の展望論文の検討を挟みながら時間地理学の流れの概要を跡づけることとしたい。

## 1. 時間地理の提起と基本的な諸概念

ヘーゲルストランド「地域科学においてヒトはどうなっているのか？」

## &lt;a&gt;

1960年代以降の地理学計量革命においてイノベーション拡散研究の展開などに中心的な役割を演じたスウェーデンのヘーゲルストランドは、時間地理学の生みの親でもある。Hägerstrand (1970) は、「時間地理学の中心的な概念が最初に英語で示された」<sup>2)</sup>論文として知られるものである。

この論文 (厳密には講演記録) におけるヘーゲルストランドの課題は、地域

科学 (ragional science) におけるヒト (people) の扱いがいかに不十分かを示し、個人 (individual) のアンデンティティを盛りこむ方向への道を探ることであった。彼は社会集団全体の集計値によるマクロなモデルが現実の個人のミクロなレベルにおける様相を無視していると批判し、例えば (ミクロな) 世帯レベルにおける基本的な仮定のバリエーションが中心地理論などの (マクロな) 原理にどう影響するかといった検討が面白いはずだとした。つまり、単なる集計値を基にするのではなく、アイデンティティをもった具体的な個人から出発して、地域社会全体の理解へと進むようなモデル作りの可能性を主張したわけである。

ヘーゲルストランドのヒトへの関心は、「生活の質」(quality of life) への関心という形をとっていた。このスローガンは、比較的計量が容易な尺度による既存の分析への批判に他ならない。さらにヘーゲルストランドは、個人としてのヒトの存在が時空間の中にあるという点から問題に迫ろうとした。このことは、それまでほとんど顧慮されなかった時間要素に注目した議論の構築を意味していた。時間要素を移動費や倉庫費といった金額の物指しで測ることは、モノには妥当してもヒトにはそぐわないとヘーゲルストランドは断じ、後に時間地理学の基本的な共有財産となった諸概念やその表現手法を提示してみせたのである。

ヘーゲルストランドの議論は三段階に分かれている。即ち、

- (1) 経路 (path) 概念の提示
- (2) 三つの制約 (constraints) の説明
  - 能力の制約 (capability constraints)
  - 結合の制約 (coupling constraints)
  - 管理の制約 (authority constraints)
- (3) 三つの制約の重なり

である。以下、この流れに従って諸概念を見ていこう。ただし、これはヘーゲルストランドの単なる要約ではなく筆者の自由な「読み」も入っている。この

点は以下の各論文についても同様である。

### < b >

時空間の中における個人は、誕生から死に至る一本の軌跡に他ならず、これを経路と見立てることができる。この軌跡は時間軸に沿ったものであるから、個人がある時点に異なる二カ所以上の地点にいたり、ある地点から離れた別の地点に瞬間的に移動 (いわゆるワープ) したりはしない<sup>3)</sup>。この経路の一部は、日や週などを単位とする生活経路 (life path) として切り取ることもできる。ここでは主に、一日を単位とする生活経路を例にあげていく。

この経路のあり方を支配するのが三種類に整理された制約である。その第一が能力の制約である。個人の能力には空間的限界がある。そしてまず指適されるのは、能力の種類によって広がり方は異なるということである。この能力の空間的広がり時間に時間を掛け合わせたものがチューブ (tube) であり、広がり方によって、

第一のチューブ：手の届く範囲に相当

第二のチューブ：視覚・聴覚の範囲に相当

第三のチューブ：本拠地 (home base) として機能する単位

に分けられる。第三のチューブは、短かい時間スケールで見ただけには個人の空間的移動と一致しないという点で他の二つとやや異質ではあるが、

- ・定期的に休息をとる (主として睡眠)
- ・帰属意識を維持する
- ・メッセージを受け取る

ために不可欠であり、住居や仕事場がこれに当る。

ただし、これらのチューブは巨視的に捉えた議論においては無視され、線的な経路によってのみ議論して差し支えないはずである。そこで、経路を記録することによって個人の時空間における移動を捉えるならば、列車のダイヤグラムのような表記法が可能になるはずである<sup>4)</sup>。ところでダイヤグラムには時間

と距離の要素が盛り込まれており、速度（傾斜として表現される）が重大な関心事であった。ここで、能力の空間的限界のもう一つの側面として、移動の限界が浮上してくるのである。

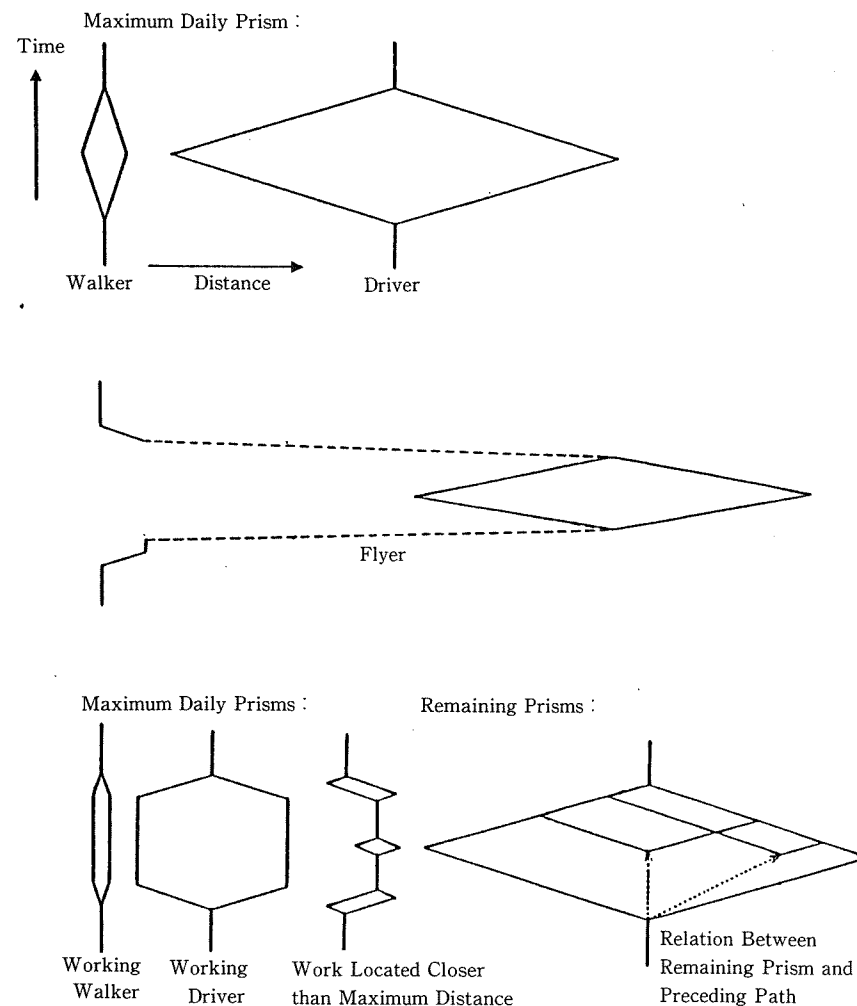
時空間における個人の軌跡は線的な経路であるが、それは結果的にそうなるに過ぎない。例えば、朝その日の行動予定を立てるときのように、ある時点でその近い未来の行動を考える場合、個人の前には無数の選択可能性、潜在的軌跡がある。しかし、移動速度の限界を越えた時・地点は当然その選択肢に入らない。さらに、一定の時間内に本拠地へ戻らなければいけないとか、どこかへ到着しなければいけない場合、到達可能な時・地点の集合体は閉じた四次元立体となる。これを島 (island) ないしプリズム (prism) と呼び、一般には空間要素を横軸に、時間軸を縦軸にとって図示される。(図1)

プリズムの大きさは移動手段の違い（徒歩か自動車か）によって変化する。ただし飛行機のような場合、飛行中は機内に隔離されているとみなし、空を飛び越えた地点には行ったことにならない。また、当然ながらプリズムは時間の経過とともに徐々に縮小していく。つまり、一定の範囲内とはいえ無数にあった可能性の中から一本の経路が確定していくのである。

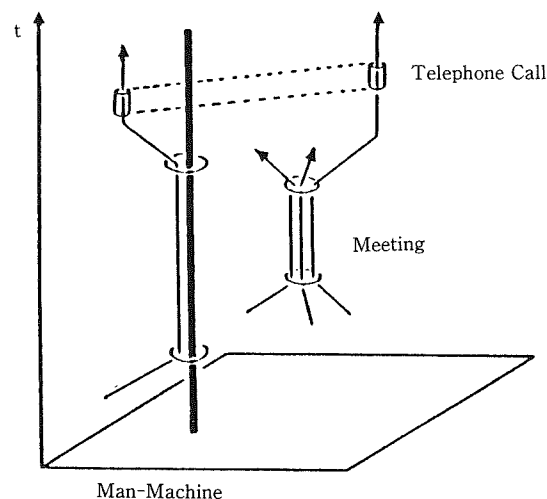
第二の制約は、プリズム内での経路のあり方を大きく規定する結合の制約である。個人の日常的活動の多くは、他の人々や何らかの設備と時間空を共有することで成り立っている。つまり、複数の個人の経路が、あるいは個人と設備の経路が、ある時点から一定時間、同一地点で、束 (bundle) を形成することの連続が日常なのである。束は、例えば電話の使用によって必ずしも空間の共有を必要としない場合もあるが、束において交換されるモノやサービスの性質によって時空間の共有（換言すれば face-to-face communication）を必要とする度合は異なってくる。(図2)

ここで肝腎なのは、束の問題は、誰かと待ち合わせるといった典型的な例のみならず、商店や公共のサービス機関のように一定の（営業）時間内にランダムにアクセスしてモノやサービスを受け取れる施設の利用、なども視野に入れ

(図1) 日単位のプリズム (daily prism) の例 (Hägerstrand, 1970)



(図2) 経路のグルーピングの例 (Hägerstrand, 1970)



ているということである。

第三の制約は、管理の制約<sup>5)</sup>である。物理的にはアクセスできる場所であるにもかかわらず、法的・文化的・習慣的・その他様々な権威の力によって立ち入りが(事実上)制限ないし禁止されることはよくある。こうしたナワバリを持つとうとするのはヒトも動物も変わりはない。これを時空間の中で捉え直したものを管理領域(domain)という。管理領域にはその外にいる者の侵入を一切禁じる部分もあれば、招待を受けたり、一定の対価を支払えば入っていける部分もある。

この管理領域の間(あるいは各管理領域の意思決定者の間)には一種の階層秩序が認められ、上位にある管理領域はその下位にある管理領域の意に反して制約の除去を強いたりすることがある。また、対等な管理領域同士の間では、取引や交渉、あるいは領域の侵犯(invasion)によって制約が除去される。

これら三つの制約が重なり、相互関連の下で個人の経路の概形を規定していくのである。例えば、収入が少なく十分な家賃を負担できないならば都市の中心部に住むことはできず(管理の制約)、職場から離れたところに住むことになるが、そうすると通勤時間が長くなるので、自由な時間のプリズムが小さくなってしまい(能力の制約)、文化活動などへの参加が困難になる(結合の制約)、といった具合である<sup>6)</sup>。

### <c>

以上に要約した部分に続けてヘーゲルストランドは、人口移動の問題、生活しやすさ(livability)の問題、産業社会における貧困の問題などに時空間的枠組(time-space framework)を適用すべきことを論じているが、ここでの関心とは逸れるので省略する。

時間地理学の出発点となったこの論文については、ヘーゲルストランドのそれまでの研究(人口移動、空間的拡散等)との関連など、興味深い点も多く、また既にいろいろと論じられている<sup>7)</sup>。しかし、本稿の関心から注目されるの

は、

- (1) 個人レベルの行動から社会レベルのモデルへ、という意識
- (2) 簡潔で、魅力的な、表現方法の提示
- (3) 事例などにうかがわれる、公共施設政策への関心

の三点である。

こうしてマニフェストは提出された。これに続いた具体的研究はどのようなものになったのであろうか。

## 2. 地域計画への応用：

レントープ「個人的活動計画の時間地理学的シミュレーション・モデル」

### <a>

ヘーゲルストランドの提示を受ける形で、地元スウェーデンにおいては、地域計画に時間地理学的発想を盛り込む試みがなされるようになった。こうした動向は、ヘーゲルストランドの下でレント大学に学んだアメリカ人、ブレッドが英文の展望論文 (Pred, 1973) で紹介したことから、広く知られるようになった。そうした流れの中で代表的な仕事をしたのがレントープであった。彼が中心になって開発したとされる PESASP (Programme Evaluating the Set of Alternative Sample Paths)<sup>9)</sup>は、時間地理学的発想によって地域計画策定を支援するシミュレーション・モデルとして有名になった。

Lenntorp (1978) は、時間地理学 (ないし地理学における時間の扱い) について編まれた論文集の一章として、PESASP の応用事例の紹介のために書かれた論文である<sup>9)</sup>。ここで紹介されている二つの事例は、いずれもスウェーデンの地方都市を例に、交通機関の条件を様々に設定して諸施設へのアクセシビリティがどのように違ってくるかをシミュレートしたものである。

レントープは、PESASP で、個人の停留点における諸活動 (stationary activities) が空間的移動によって結びつけられている様子を描き、それをシミュレー

ション・モデルに再現しようとした。その根底には、個人による実際の選択の結果である観察された行動 (observed behaviour) よりも、潜在的な行動の可能性 (possibilities) を分析することの方が、時間地理学にとっては重要であるという立場と、必要なサービスを受けるため一定時間内に到達できる施設の選択肢 (alternatives) は多いほど好ましい、といった価値判断があったようである。

レントープがこの論文で紹介している事例は、

- (1) ユレブロ (Örebro) 市における郵便局へのアクセス
- (2) カールスタット (Karlstad) 市における保育園へのアクセス

の二つである。以下、この二事例に従って PESASP の概要を見ていくことにしよう。

### <b>

事例(1)はユレブロ市における郵便局へのアクセスを例に、一定の制約条件下の個人 (勤め人) が何通りの郵便局へのアクセスを選択肢として持ち得るかを、個人に与えられた移動手段の条件を様々に設定しながらシミュレートしたものである。

ここで想定される個人の一日の行動は次のようなものである<sup>10)</sup>。

～12:00 在宅

13:00～17:00 勤務

18:55～ 在宅

加えてこの個人は、この日、郵便局へ行行って所要時間12分の用事を済ませなければならない。要するにこの用事は、12:00～13:00か17:00～18:00に片付ける必要があるわけだ。

施設配置については、住宅・仕事場・郵便局の位置が以下で述べる手続きに従って表現される。まず、後で座標の代りに用いる250m 四方のメッシュを対象地域にかける。次に、一辺1500m の三角グリッドを対象地域にかけて、三角形

の頂点が住宅地域に当たっていればそこを住宅の地点とし、業務地域に当たっていればそこを仕事場の地点とする。郵便局は対象地域内の全てを拾い上げる。その上で、選出された諸施設（住宅・仕事場・郵便局）はいずれも所属メッシュの中央に位置するものと見なして位置を整える。1500mの三角グリッドを用いるのは、住宅・仕事場の地点数を無闇に増やさないためである。オレプロ市の例では住宅17地点、仕事場6地点、そして郵便局は現実の配置に従って9地点が選出された。

移動手段として取り上げられるのは、徒歩・自転車・自動車・バスの四つであり、移動はそれぞれ次のように表現され（最低）所要時間が計算される。

徒歩：時速 5 km

2 地点間の移動距離＝直線距離×1.2

同一地点に施設がある場合の移動距離＝150m とする。

自転車・自動車：

対象地域の主要道路と、各地点から最寄の主要道路までの道からなる道路網について、各結節点（node）間の距離・速度を時間帯を考慮して算出する<sup>11)</sup>。

バス：最寄のバス停と施設の間は徒歩に準じ、バスに乗っている間は自動車に準じて算出する。これに待ち時間を考慮する<sup>12)</sup>。

ところで、選択されうる経路は住宅1地点について、仕事場への通勤途中で郵便局へ寄るか帰宅途中で寄るかという2通りの手段の選択があり、さらに9カ所の郵便局のどこに行くかの選択があることから $2 \times 9 = 18$ 通りある。これに仕事場の地点数6ヶ所を掛けると、

$$2 \times 9 \times 6 = 108$$

となり、これが住宅1地点に対する潜在的な経路の総数となる。

この108通りの経路の内いくつかが時間制限に照らして実現可能か、換言すればブリズムの中に収まるかを、与えられた移動手段ごとに検討すれば、移動手段の優劣が明らかになってくる。特に、バスの場合、運行速度と運行間隔の条件

を変えたいいくつかのケースを想定することで、運行方法の変更がアクセシビリティの向上にどのように寄与するかをシミュレートすることが可能になる。ユレプロ市の例では、バスによる移動の場合、運行速度と運行間隔によってアクセシビリティは大きく異ってくる、運行速度の効果が現われるのは運行間隔が十分に短くなってからであること、などが明らかにされた。

事例(2)はカールスタット市における保育園へのアクセスを例に、施設配置ないし交通手段の改善策の効果をシミュレートするものである。この事例については既に邦文での紹介があるのでごく簡単に述べるにとどめる<sup>13)</sup>。

共働きの夫婦が保育園児を抱えている場合、夫婦の少なくとも一方が公共交通機関を使って保育園へ子供を送迎するはめになることがしばしばある。ところが住宅と仕事場、そして保育園の位置関係によっては、決められた時間で送迎をすることができない場合も当然あり得るわけである。どの地区の住民がそのような条件下に置かれているのかを明らかにし、その改善策として考えられる対策がどの程度まで効果的かを検討するのが、ここでの課題である。

カールスタット市の事例では500mメッシュを住宅地区として選び、各メッシュの中心を住宅地とした。加えて仕事場6ヶ所と保育園6ヶ所が位置づけられた。現状を反映したこうした状況の下では、与えられた条件で保育園への送迎を実行することができない住宅地が市の東北部を中心に分布することが明らかになった。そこで次に、送迎が不可能な住宅地を無くすため、また条件の悪い住宅地について仕事場の選択肢を増やす対策として、バスの運行頻度の改善、新たなバス路線を設定、新たな保育園の開設が考えられ、その効果がシミュレートされた。その結果、バス運行の改善には一定の成果が認められるものの、周辺部の住宅地における保育園の新設は仕事場の選択肢を増やす対策としてあまり効果的でないことなどが明らかにされたのである<sup>14)</sup>。

#### <c>

以上の2事例のように PESASP は、一つの閉じた空間（例えば都市）におけ

る施設配置や移動条件という環境がその中に生きる個人の行動をどの程度まで制約しているのかを、行動上の選択肢の多寡によって計測し、さらに環境側の変数を様々に設定しながら実現可能な選択肢の増減を見ていくことで、現状における問題解決策の効果を見極めるシミュレーション・モデルであった。このようなモデルの性格が、ヘーゲルストランドのマニフェストにも窺われた公共施設政策への関心を引き摺ったものであることははっきりしている。一定の制約条件の下で課題を実行する（実行しようとする）個人というイメージ、そして同じ都市に住む個人ならば誰もが十分に公共的サービスを受けるべきだといった考え方は、ヘーゲルストランドを踏襲するものであると同時に、その後の時間地理学の流れにおいて一つの柱となっていくものであった。

ここで紹介したように、PESASP は比較的単純な前提の上に組み上げられたモデルであり、その妥当性については議論の余地は小さくないと思われる。特に、現在の日本の都市にこれをそのまま適用してもあまり意味は認められないだろう。しかし、少なくとも社会的公正といった発想に立てば、現実の人々の行動のあり方はともかく、典型的なパターンの生活を生きる個人に諸施設を利用する機会が保証されているか否かは、検討に値する課題であり、またそこから有益な成果を得ることができるはずである。さらに付け加えるならば、ヘーゲルストランドやレントープを輩出したスウェーデンの地方都市社会においては、PESASP の描くような個人の行動パターンに一定以上の現実性があったのではないと思われる<sup>15)</sup>。

レントープの PESASP に代表される時間地理学的シミュレーション・モデルは、ヘーゲルストランドのマニフェストに対する極めて具体的な回答であった<sup>16)</sup>。ところが、時間地理学は時代の流れの中で分裂と変貌に直面することになっていくのである。

### 3. 時間地理学の分裂・変貌と、わが国における評価・受容の状況：

榎谷圭司「時間地理学研究の動向」

#### < a >

ヘーゲルストランドの問題提起とそれに呼応したレントープらの仕事といった関係は、1970年代に入って英文論文によって広く知られる以前から、つまり1960年代後半から研究の実体があった。この段階の時間地理学は、比較的プリミティブなアイデアとそれによる社会工学的なモデル構築という、理解しやすい素朴なものであった。ところが、1970年代になると時間地理学は大きく変化しないし展開を見せることになる。そうした傾向が進んだ背景には、ヘーゲルストランド自身やブレッドなど、初期の時間地理学確立に一定の役割を果たした研究者たちの関心が地域計画的なモデル構築から急速に離れていった、という事情があった。

この間の経緯を捉え、併せて時間地理学がわが国への導入の状況について検討するため、ここでは榎谷(1985a)を中心に邦文による時間地理学の紹介や研究を見ていくこととする。

榎谷論文は、邦文による時間地理学の展望論文として、現段階で最も充実したものである。内容は、

#### I はじめに

#### II 研究の発端と初期の展開

##### (1) Hägerstrand の発案

##### (2) 実証研究への応用

#### III Hägerstrand の問題意識とその受容—1970年代の展開

#### IV 実証的研究の分派—1980年代前半の状況

#### V むすびにかえて

と章立てされ、II～IVがそれぞれ実質的な1960、70、80年代に割当てられてくる。ここで採用されている時期区分には、特に異を唱える研究者もおらず、一応妥当な認識とされているようである。また、本稿でも前2節で論じたところに相当するIIの内容について、大方の研究者の評価や解釈は一致している。



しかし、1970年代以降に登場した時間地理学の様々な流れをどのように評価するか、またどのように受容して研究を行うべきかについては、わが国の研究者の間にコンセンサスが成立しておらず、櫛谷の所説も絶対的な支持を得ているわけではない。現状においては、例えば大学用の教科書で時間地理学が取り上げられる場合、IIの段階（ヘーゲルストランドの提起と PESASP）は紹介されても、櫛谷論文がむしろ力点を置いている1970年代以降の動向については無視されるか（高阪，1985）、補論として活字のポイントを落して簡単に触れられる（杉浦，1985a）のが精々なのである。

以下では、櫛谷論文のIII・IVに従って1970年代以降の時間地理学の分裂と変貌を追ひ、併せてわが国における時間地理学の評価や受容について考えることとする。

#### <b>

レントープの PESASP に代表されるような研究は、ヘーゲルストランドの挙げた制約条件のうち能力の制約に注目したものであった。しかし、これらとは別に、結合の制約や管理の制約に関心を向けた実証研究の流れも存在している。1970年代半ば以降のヘーゲルストランドは、結合の制約を個人とモノの間に当てはめて、イノベーション拡散を見直したり、個人とその環境の関係を共存過程として見ていくことや、管理の制約を強調して、時空間という限定された資源の占拠をめぐる競合という視点から社会を捉えることなどを主張していたのである。

これを受ける形で展開された実証研究には様々な方向性があった。当時から時間地理学の意義を強く主張していたプレッドは、Pred (1977) で時間地理学の、プランニング以外の応用範囲として、

- ・個人と環境の共存過程としての「景観」の問題
- ・イノベーション拡散の問題
- ・人口移動や都市発展の問題

・時空間資源の占拠競合という視点からの政治地理学  
を例示し<sup>17)</sup>、さらに可能性のある研究として、

- ・キーパーソンの生涯経路に注目した学界史<sup>18)</sup>
- ・小スケールの時間地理学的文脈に従った歴史的事件の再解釈
- ・産業社会における疎外の理解
- ・個人の経路への社会的影響の変遷を通じた、家族の変化の検討

を挙げている。ここでは特に、「産業革命」以降の社会における疎外や家族についての考察が強調されているところに、プレッドの社会史への傾斜が窺われる。

さて、こうした中でヘーゲルストランド自身は、個人の生活史を環境との関係を重視しながら問題にする方向での研究を主張していた。この方向は、一方では自然と人間の関係に焦点を置いた実証研究へと展開し、1980年代に入ってから、工業社会以前の伝統的生活様式における時間利用の生態学視点からの研究である Carlstein (1982) の大著を生んでいる。(A)<sup>19)</sup>

また、ヘーゲルストランドの個人史への関心は、他方では、特定の環境における個人誌の形成過程を外面から明らかにしようとする Mårtensson(1979)などの研究へも影響を与えていった。(B)

一方、プレッドは、社会学者ギデンスの構造化理論を取り入れ、個人と社会の弁証法的相互関係に基づく時間地理学を構想し、実証研究として資本主義的生産活動の草創期における家族や個人の時間利用の変化を捉えることを試みた社会史的研究などを発表している<sup>20)</sup>。また、ギデンス自身も、人間の行為と社会構造の相互作用として社会的再生産を論じる際にヘーゲルストランドの時間地理学に言及したりしている。(C)

このように1970年代以降の時間地理学の研究には、当初の地域計画的な方向とは違った、三つの研究の流れが認められるのである。

#### <c>

ここで櫛谷が1970年代以降の研究潮流として整理した三つは、いずれも経路

として表現されるヒトとその経路が置かれる時空間との関係を捉えようとするものである。しかし、この三者は「ヒト」と「時空間」をどのように読み換えるかという点や、両者の間に働く作用を（ヒトから見たとき）受動的なものとするか相互作用的なものとするかという点で、互にズレを背負っている。すなわち、

(A)人間と自然／受動的

(B)個人と社会／受動的

(C)個人と社会／相互作用的

といった相違があるわけだ。ちなみに、前出の PESASP のような地域計画的研究は(B)と同様な構造をもっている。

さて、時間地理学のわが国への紹介は1970年代後半からあったが、教科書などに記載が増えるのは1980年代に入ってからである。当然ながら、わが国の研究者によるオリジナルな研究は、現段階ではほとんどない。

こうした中で、櫛谷自身が取り組んできた実証研究は、(A)のタイプのものではあった。櫛谷(1985b)は、一見無秩序に見える内房の漁師の行動(漁船の運行)を、魚群との結合という視点から合理的に解釈することを試みた研究であった。また、櫛谷の最近の学会発表<sup>21)</sup>は、大規模排水システム導入以前の新潟平野における泥田での米作労働について時間地理学的解釈を試みたものであった。しかし、こうした研究は、時間地理学という理論的な枠組の仰々しさに比して内容が乏しいという見方もあり、特に「伝統的な」漁業／農業地理学などからは批判的に見られているようである。

(B)や(C)のタイプの研究は、管見する範囲では公刊された研究はないようである。ただし、(C)に近い研究として、東京神田三崎町の都心化にともなう変化を社会的再生産の考え方をを用いて捉えようとした広松(1986)が、未公開ではあるが注目される<sup>22)</sup>。しかし、総じてわが国における時間地理学の研究動向は、少なくとも櫛谷が志向するような方向には向いていない。

実は、わが国の地理学界には時間地理学を巡って櫛谷の方向とは別の方向に

向かう見方がある。それは、主として時間地理学の重要な隣接分野といえる行動地理学<sup>23)</sup>に取り組んできた研究者たちが共有している考え方であり、モデル構築の手法として初期の地域計画的研究やその流れを汲む研究を再評価しようとするものである。こうした志向性は具体的な研究成果こそ生んでいないものの、教科書的記述の現状が象徴するように、学界における一つの底流となっている。

時間地理学に関する古典的文献の翻訳作業を進めているグループである時間地理学研究会<sup>24)</sup>の動きなども、むしろこれまで行動地理学的研究に取り組んでいた研究者たちの活動として注目される。筆者自身はこの研究会のメンバーではないが、アウトサイダーとして研究会での議論の流れを聞く機会があった。それによって(未だ公刊されていないものも含めて)研究会の成果の一部に接することができたのであるが、中でも筆者の立場から特に興味深かったのは、翻訳作業に先立つ論文の渉猟・輪読・選択を通じて「論文を書いている本人たちの意識はともかく、行動モデルの構築に含意のある研究」<sup>25)</sup>の掘り起こしが行なわれたという点であった。つまり、欧米における研究の流れを、人脈的な繋がりや、引用分析などによって見ていく櫛谷の展望論文の方法に対して、時間地理学研究会は内容に即した論文の全画的な読み直しと、ある意味では自由な再解釈を進めたわけである。

このように、わが国における時間地理学の評価・受容の現状は、櫛谷自身の研究のように一層「人文主義的(humanistic)」な方向に向かうものと、行動モデルにこだわり行動地理学的な方向に向かうものという二つのベクトルを内包しているといえることができるのである。

#### 4. 制約条件下の生活実態の描写：

パーム「非大都市地域の女性たち：時間収支研究」

< a >

最後に検討するパームの仕事は、時間地理学研究会が「掘り起こした」行動モデルの構築に含意のある研究の一つであり、時間地理学の真に生産的な部分としてのモデル志向を「論文を書いている本人たちの意識はともかく」引き継いでいる、として再評価されているものである。

時間地理学研究会が「掘り起こした」パームの研究は、プレッドとの連名になっている Palm & Pred (1978) と、ここで取り上げる Palm (1981) である。前者は、アメリカ合衆国の大都市における女性の行動に対する制約条件のあり方を、典型として示された、

- (1) 就学年齢に達しない子供のいる独身の勤労婦人（母子家庭）
- (2) 就学年齢に達しない子供のいる既婚の勤労婦人（共働き）
- (3) 十代の子供があり、自動車を運転できる郊外の専業主婦
- (4) 自動車を運転できない郊外の専業主婦

という4つの場合について描き、その含意を述べた論文である<sup>26)</sup>。

これに対し、ここで紹介する Palm (1981) は、アメリカ合衆国の中でも辺境の地であるコロラド州のロッキー山中の鉱業都市（というより集落）における女性の行動に対する制約条件を論じたものである。アメリカ合衆国において大都市から地方、特にサンベルト地帯や西海岸、あるいは西部への人口移動が新しい動向として注目されていた当時の状況を反映してか、大都市部から辺境に移り住んだ女性の生活実態がどのようなものになるか、というのがこの論文のテーマになっている。特に、自発的な意志によってではなく、夫の仕事の関係で移動を余儀なくされた女性が、いかに不当に就業機会から疎外されているかを明らかにすることに議論の力点が置かれている<sup>27)</sup>。そうした点でこの論文は、その分析対象も、問題意識の存在も Palm & Pred (1978) で展開された大都市部における女性の生き方の分析を引き継いだ研究として位置づけられるものである。

また、Palm & Pred (1978) が、少なくとも論文としては全く演繹的なスタイルであった<sup>28)</sup>のに対し、この論文では研究の具体的な過程も多少は紹介さ

れている。

## <b>

この研究で取り上げるコロラド州のクレイグ (Craig) とペオニア (Paonia) は、当時の石炭鉱業の発展とともに大都市部からの流入による人口の急成長が見られている町である<sup>29)</sup>。どちらも山中に孤立した町であり、クレイグはデンバーから180マイル、最も近い都市であるグランド・ジャンクション (Grand Junction) からでも125マイルも離れている。ペオニアも同様にデンバーから190マイル、グランド・ジャンクションから66マイルの距離にある。

1978年の夏に、クレイグで49人、ペオニアで57人の女性を対象に面接調査を実施し、この内およそ3分の1に当たる37人から15分刻みの行動記録を作成する同意を得た。これを基に、当地の女性の時間収支を、既存の地の調査と比較可能な形で集計した。また、併せて就業形態や関連する項目も調査された。事前の予測としては、大都市部の女性に比べて当地の女性は、

- (1) 「通勤以外の移動」により多くの時間を消費する
- (2) パート・タイムなど、就業時間の短い職に就く者が多い

と考えられた。

集計の結果は、移動時間の総計が大都市部の2倍になるなど、こうした予測を支持するものであった。そして、さらに明らかになったのは「自由時間」、すなわち構造化されない活動に割ける時間が大都市部の3倍もあるという、当地の「時間豊富 (time affluent)」な状態であった。これは大都市の女性の「時間飢饉 (time famine)」とは際立った対象を見せるものであった。

さて、次に、このような時間収支分析の結果を時間地理学的視点から捉え直してみる。クレイグやペオニアのように、孤立した立地条件に置かれた町に住む者は、長い時間をかけて移動する必要に迫られる。そのために他の活動を多少なりとも犠牲にせざるを得なくなる。家族の中の誰かがこの役を引き受けなければならない以上、家庭内の役割分担が伝統的なものであるほど、つまり買

物は女の仕事と決めつけてしまえば、女性がフル・タイムの職に就くことは難しくなる。

女性の就業を阻む要素は、この他にもある。炭鉱の鉱内労働や建築関係の重労働など女性が「してはいけない」仕事（一種の「管理の制約」）が存在することはともかくとしても、例えばコンピュータ関係の専門職など、通例報酬の大きい職を当地の通勤可能圏内で得ることが難しいということも、特に都市部から転入してきた女性にとっては重大である。

時間収支分析の結果としての「自由時間」の卓越は、就業を希望しつつも就業機会に恵まれない女性が相当の比率に上ぼることの帰結である。こうした状態でも、彼女たちが地元のサークル活動などに参加することや、家事に熱中することで満足できるような場合はさして問題にならない。しかし、専門職としての技能を持つ女性が夫の仕事の都合で一緒にやってくるような場合には、深刻な事態が生じることになる。

時間収支の分析からは、構造化されない「自由時間」が女性たちにとって資源なのか重荷なのか、といったことは判らない。また、数年が経過し、町の成長とともに時間収支がどう変化するかということもこの調査だけではわからないが、追跡調査によって明らかになる部分もあるだろう。

### <c>

バームのこの研究は、先行したブレッドとの連名論文とともに、アメリカ合衆国の女性が置かれている環境において、女性の職業選択の機会がどれほど甚だしく制限されているかを時間地理学的枠組を用いて告発するものである。その意味において、櫛谷の整理の(B)と意識の上で通じていると考えられる。

しかし、バームの論文の価値は、調査を通じて抽出され、論文の中で例示される典型的事例の生活時間構造が、簡潔さとリアリティに溢れた形で描写されているという点にある。2本の論文のいずれにおいても、最終的に描かれる典型例を取り出す手続きは明確には説明されていない。おそらくその過程は、多

分に artistic なものなのであろう。その意味においては、つまり調査技法として再現性を持ち得ないという点では、バームの仕事を科学的と呼ぶには無理があるように思われる。にもかかわらず、バームの業績はその説得力によって大いに意義を認められるのである。

バームの論文は、現実の社会問題（具体的には女性の就業機会の問題）に対する意識が執筆動機となっている。そうした意味では、解決策を提示する方法を探ろうとする（あるいはシミュレートする）ものではないとしても、問題を含んだ現状を簡潔かつ明晰に表現しようとする姿勢において、例えばレントープの仕事にも通じるような部分がある。

バームの作業は、生活実態のあり方を方向づけていく制約条件の存在を指摘（ないし告発）するものであった。制約条件が何らかの問題状況を生みだしているような場合に、生活時間構造を明らかにする時間地理学的な図式化は、人々の生活実態を説得力のある形で描写する方法として極めて有効なのである。

## II. マーケティング論への応用の可能性

さて、前半部において検討した時間地理学研究の視点をマーケティング論に應用して、新たにマーケティング技法なり発想なりを引き出す道を探るのが、本稿後半部の課題である。

正直なところ、筆者は現段階ではこの課題に対するはっきりした解答を用意できていない。漠然とした「感じ」を明晰な言葉で語れるところまで思考が深化していないのである。しかし、手掛りとなるようないくつかの論点は明らかになっていると思う。以下では、マーケティングへの応用の「可能性」を求めるといって、そうした論点を整理していく。

一般に、ある学問分野の成果を他分野に應用しようとする際、第一に必要なのは、成果として確立されている知識なり技術の内で應用可能なものは何かを

明らかにすることである。時間地理学の場合、その学問的成果として応用し得るような成果にはどんなものがあるだろう。まず、本稿前半部にける検討から、

- a・基本的概念や表現手法
- b・地域計画手法 (PESASP)
- c・構造化理論などによる日常生活への洞察
- d・ライフ・スタイルの記述手法

の4点を時間地理学の成果として指摘することができる。この内a・b・dは一応、本稿で紹介したヘーゲルストランド、レントープ、パームの研究とそれぞれ対応するものであり、cは櫛谷の強調する方向での研究に対応するものと考えられる。以下では、これらの内cを除く3点についてマーケティングへの応用の可能性を探っていくことにする<sup>30)</sup>。ただし、議論の流れを考えて、 $c \rightarrow b \rightarrow d \rightarrow a$ の順で論じていく。

## 1. 地域計画手法としての限界と可能性

日本人の研究者の大多数は、PESASPのようなシミュレーション・モデルを見たとき、これを非現実的に過ぎるモデルであると考えてしまうだろう。始業・終業時刻は職場によって当然バラツキがあるし、通勤条件にしても同じ職場の同僚の間においてさえ大きなバラツキが認められるのが普通である。特に、大都市を対象として考えなければならない場合、PESASPのような素朴な条件設定は、典型的生活（その妥当性は別に論じるとして）を送る者が権利行使の機会を与えられているかを検討するためには有効でも、実際の人々の行動をシミュレートするモデルとしては、甚だしくリアリティを欠いた不完全なものと断言せざるを得ない。

つまり、PESASPに代表される個人の行動モデルは、一見すると普遍的な数学的モデルとして表現されているように思われるが、実はスウェーデンという国の文化なり生活習慣を色濃く反映したモデルとして理解されるべきものな

のである。こうしたモデルが、現実をよく再現するという意味で有効性を持つためには、住民の大半が均質的な居住条件・勤務条件の下にある地方小都市などにおいて、結合の制約が大きい（例えば、公共的サービスの業務時間が短い）など、何らかの制約が極めて大きく、顕在化していることが必要になるはずである。パームが男性に比べて様々な意味で制約の多い女性の行動を取り上げ<sup>31)</sup>、また移動条件という形で能力の制約が大きい僻地の事例を論じているのも、これと無関係ではないだろう。

従って、時間地理学の成果の一つとして個人の行動モデルを織り込んだ地域計画手法を使おうとするときには、さしあたり2通りの目的が考えられる。すなわち、まず第一に、

- (1) 公共施設などの利用機会が「普通の」生活者に公平に与えられているかを検討する

ような場合がある。PESASPの本来の目的もこうしたところに置かれているのであろう。しかし、(1)について明らかなのは、このモデルにおける「普通の」生活者の行動は実際の地域住民の生活実態を必ずしも反映しない、ということである。それでも、公共施設の配置が適切なものであるか、すなわちパブリック・アクセスが確保されているかどうか、を検討する手続きとしてPESASPや同種のモデルを改善・再評価していくことは必要であろう。

また、他方では、パームが例えば僻地の女性について行なったように、対象とする集団を制約のあり方に従って分節化し、ライフ・スタイル論とも結び付けた形で行動モデルを構築する場合にもこうした比較的素朴な手法はそれなりの有効性を持ち得るだろう。つまり、

- (2) 分節化された個々の集団だけに有効な行動モデルによって、その集団にとっての便宜性を検討する

という目的を明確に意識した上で、手法を利用するわけである。その際、次節で論じるような形でのライフ・スタイル分析と結合させた研究の展開も相当の可能性を持つものと思われる。

## 2. ライフ・スタイルの記述

ある地域社会の構成員の時間収支分析を行なおうとするとき、最頻値（モード）や平均値のみを論じて、あまり意味のない場合が多い。例えば、NHKの行なっているような国民生活時間調査の公表データのように平均値が示されても、その平均値に対してサンプルがどのような散布を見せるのか、単純な正規分布を成すのか、それとも何らかの特徴あるクラスターが形成されるのか、あるいは、性差、都市・農村、職業といった要素が各サンプルの生活時間をどの程度説明できるのか、といった点が明らかにならなければ、マーケティングへの活用は難しい。

換言すれば、社会集団の成員が、それぞれどのような生活時間構造を持っているのか、ということが、集団間の差異が明確になるような形で明らかにされなければならないのである。

その意味で、想定された（あるいは大量のデータから抽出された）典型例の時間地理学的経路を描き、そのライフ・スタイルの特徴を描いていく手法は、手続きに問題を含みながらも、Palm & Pred (1978) や Palm (1981) のように説得性に満ちた事例を提示することに成功すれば、その事例をもとに、あるライフ・スタイルを共有する集団全体を一つの市場セグメントと見なしたマーケティング戦略に貢献することができるだろう。

ただし、一口にライフ・スタイル論といっても、事例の取り上げ方、描き方には根本的なところで発想のばらつきがある。一方には、例えば『アクロス』誌でしばしば試みられているように<sup>32)</sup>、恣意的に事例を選択したり、先端的事例を探し求めたりするものがあり、もう一方には大量の実態調査データからクラスターを取りだし、各クラスター内の最頻値ないし平均値として事例を捉えていくものが考えられる、ここで、そのどちらがサイエンスかを問うことは無意味であろう。マーケティング論の立場からすれば、商品開発や業態開発に有効

な示唆を与えるというような形で現実に役立つものである限り、どちらも等しく有意義である。

時間地理学的手法は、ライフ・スタイル論の両極のどちらとも結びつくことが可能である。例えば、

- (1) 先端的事例を記述する際、その日常的な生活時間構造を時間地理学的に捉えて表現すること

から新たな示唆があることは充分期待である。例えば、こうして抽出された日常生活の経路が何らかのボトル・ネックを抱えているような場合には、その解決を図るところから新しい商品・サービスへの発想のヒントが得られることもあるだろう。また、一方では、

- (2) 時間地理学的な視点から調査フォーマットを作成し、実態調査データを収集してクラスター分析等にかけること

なども消費者の生活時間構造の実態把握の方法として可能であろう。

前者は特に、生活の個々の場面を時空間的な連続の中で把握することを通じて、いわゆる「シーン分析」に深みを与えることが期待される。マーケティングで問題とされる「シーン」は、時空間の断面に他ならない。個々の「シーン」は独立的に分析可能なものであるとしても、ライフ・スタイルというテキストの中で「シーン」を位置づけ、時空間的連続性を意識することは、より深い分析・戦略の助けとなるだろう。例えば、特定の「シーン」を引き立てるためには、直前の「シーン」との連続性を意識させる演出や逆に分断の演出が必要となる場合もあるだろう。時間地理学的発想は、日・週・月・年などを単位とするリズムの中で、あるいはライフ・サイクルの各ステージにおいて、時空間文脈に「シーン」を意義づける試みの一助となるだろう。

一方、後者は実際にこうした考え方に従った研究が提出されるまでまだ少し時間がかかりそうである。これは、一つにはプライバシーとの関係でデータ作成が容易ではないという事情があるが、それ以上に重大なのは（例えば）クラスター分析にかけ易い形でプリズムや経路のデータを数値化する手法がほとん

ど開発されていないとうえことである。しかし、そこさえ突破できれば様々な展開の可能性が見えてくることであろう。

### 3. 表現技法としての応用

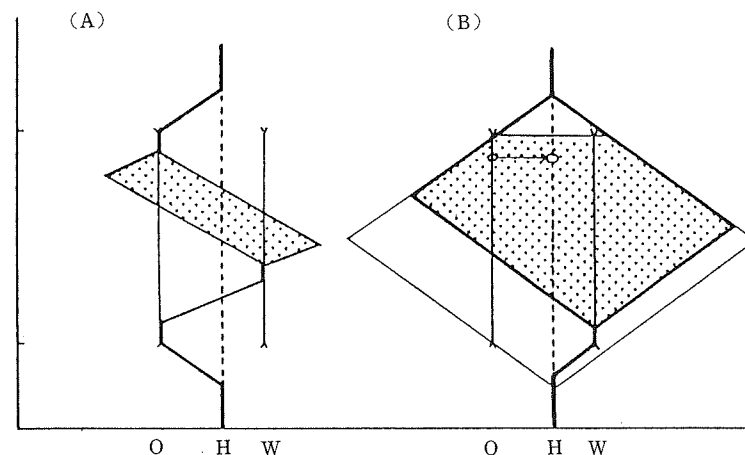
ある分野において用いられる術語を他の分野において用いる際には、必然的に意味の変質が起こる。これを術語の乱用として否定的に見るか、創造的営為として容認、ないし肯定的に評価するかは、人によって場合によって様々であろう。いずれにせよ移植された術語は定着せずに消えていくか、根を張ってその分野独自の意味を確立していくか、という二つのベクトルの間に適宜位置づけられていくことになる。そして、このことは、概念や表現手法などについても一般的に当てはまるのである。

ヘーゲルストランドが提出した時間地理学的な概念や表現手法は、その簡潔さゆえに急速に広く知られるようになった。それに伴って、それらしいお決りの図さえかけば時間地理学なのだ、といった「誤った」理解も広まって行った。その結果、同じ地理学の分野においても、ヘーゲルストランドが本来意図した時間地理学の発想やその後の時間地理学の文脈をほとんど顧みないまま、概念や表現だけを引用する研究も現われるようになってきたのである。

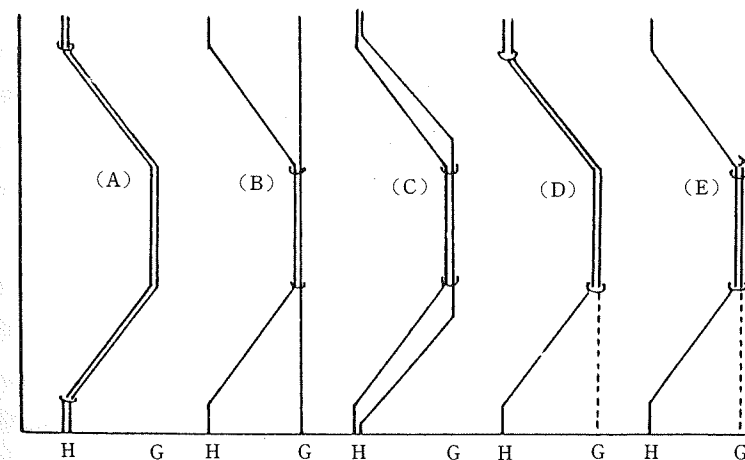
しかし、そのような「誤用」「誤読」ないし「流用」に基づく研究が無意味であるとは限らない。むしろ、特定の学派が特定の文脈においてのみ用いている概念をより一般的なものとしていく創造的営為として、この種の研究を積極的に評価する立場もあり得るはずである。

例えば、高橋（1987）は農家の行動圏を表現する視覚的手法の一つとして、明らかに時間地理学風の表現手法を用いている。高橋の議論自体はオーソドックスな行動圏への関心に基づいたものであり、時間を考慮した地理学ではあっても、いわゆる時間地理学的研究とは異質な研究である。しかし、この研究がその目的に照らして評価に値するものである限り、またその議論に時間地理学

(図3) 営業担当者の「直行直帰」実験



(図4) スキーヤーとスキー板の結合





風の表現手法が一定の貢献をしている限り、こうした表現技法の流用は承認されるべきであろう<sup>33)</sup>。

このことから一歩踏み出せば、ヘーゲルストランド以来の時間地理学的な諸概念や表現手法を、時間地理学の文脈にこだわらずに流用し、マーケティングへ（のみならず他の分野へも）応用していくことも、それが創造的な営みである限りは許されるはずである。こうした方向での応用には様々なものが考えられるが、さしあたり筆者が考えている応用例を2例ほど挙げておきたい。

最初の例は、

#### (1) 個人の行動を描写し説明する方法

として時間地理学の表現手法を利用し、制約条件の変化が個人の行動のあり方（例えば、行動の自由度の大きさ）をどう変えるかを説明しようとするものである。図で示したのは、販社の営業マンが、販社営業所に出勤して指示・連絡を受けてから問屋へ向い、問屋の営業マンと打ち合わせたり、連れ立って小売店訪問をする場合のプリズム（A）と、営業マンが自宅に置かれたファックスで指示・連絡を受けてから問屋へ直接出向き、帰宅後報告書をファックスで送るという「直行直帰」制度の場合のプリズム（B）である。これに近い勤務形態は、実際にある企業が実験中である<sup>34)</sup>。もちろん、その企業は発想の段階でこんな図をいちいち描いたわけではないだろうが、この実験で効果として報告されたという「問屋との打合わせ時間が充分取れるようになった」「問屋の営業担当者と一緒に小売店を訪問する機会が増えた」とった状況は、このプリズムの図によって明確に説明され、その理解も容易になるのである。（図3）

もう一つの例は、

#### (2) ヒトとモノの結合の制約を描写する方法

として時間地理学的表現を流用し、ある消費活動（場合によっては「シーン」と呼んでもよからう）に必要とされる諸資源（主としてモノ）がどのように調達されるかを図式化し、様々な活動から抽出された図式を別の活動に当てはめることによって新商品（特にサービス商品）開発へのヒントを得ようとするも

のである。図で示したのは、モノが一つだけの場合である。さしあたり、活動はスキー、モノはスキー板と考えてみよう。スキーをするには、スキー場でヒトとスキー板が結合しなければならない。従来、スキーに行くときは、スキー板は自分のものを運んでいくか（A）、スキー場までは手ぶらで貸しスキーを利用する（B）のが普通であった。両者には一長一短があり、履き慣れたスキー板を取るか荷物が軽い気楽さを取るかの選択に迫られたものであった。これを解決したのがスキー板の宅配（C）である。この他、スキー板の事例には（少なくとも現段階では）不適当と思われるかもしれないが、現地調達→持ち帰り（D）<sup>35)</sup>、現地調達→使い捨て（E）、などのパターンも想定し得るだろう。結合の必要なモノの数が増えればパターンは複雑なものになっていくが、それなりに整理していくことは不可能ではない。（図4）

このような乱暴な方法による応用は、正統的な時間地理学の理解を求めて研究を進めている人々からは、厳しく批判されるか、無視されることになるだろう。しかし、マーケティングの分野において貢献がなされ得るとすれば、一定の意義は認められるはずである。

### おわりに：「時間」論の発想

冒頭でも述べたように、本稿で筆者が試みたのは、差し当たり直接的には時間地理学という研究の流れをマーケティング論に応用する可能性を探ることにあつたが、同時に意識されていたのは、マーケティング論における「時間」論を改めて提起することであつた。実はその背景には筆者が個人的に直面している問題があつた。

筆者は時計を携帯する習慣がなく、行動予定はいつも非常に大まかなものである。タイム・テーブルに従って時間を分節化し、スケジュールをこなすといった現代ビジネス社会らしい発想は、筆者には似合わないようで、「サラリーマンは勤まらない」というのが周囲の評である。筆者は、昨年、現在の職場に単身



で赴任して以降、休暇期間を別にすると、月に2回弱程度週末に「帰省」しているだけで、通常は松本に居住している。

神奈川県で地方公務員をしている筆者の妻は、職業柄、またその性格からして筆者とは逆に「時間にパンクチュアル」であり、長期的に計画を立ててスケジュール消化をしていくことに充実を感じるタイプである。実際、妻の日常生活は、彼女の性格と職務上・育児上の必要（妻は長男を保育園に預けながら勤務している）とが相俟って、極めて規則正しく、また予測可能なものとなっている。つまり、生活時間の構造化の程度が大きいのである。

このような筆者の「家族」において私的な諸問題をめぐるキーワードの一つが「時間」である。筆者と妻は、生活時間構造の違い（それは職務上・育児上の要求の違い＝ジョブショップとアセンブリーラインのリズムの違い＝に根差した時間感覚の違いでもある）を前提として、家族関係の維持・構築のためにコミュニケーションを図ることを切実に必要としている。

こうした経験から筆者が感じたのは（その構造化の度合も含めて）生活時間構造の違いが、個人の感覚や価値観、さらには（例えば自由時間における）行動の選択に大きく影響する、ということであった。そして、このような時間にかかわる問題が、マーケティングにおける市場／消費者理解の試みの中で充分考慮されていないのではないか、さらには、マーケティング論全般について時間に関する考察が不十分なのではないか、という疑問であった。

ファイロファックスがヒット商品となるような誰もが忙しい時代である。何も今に始まったことではないが、ビジネスの世界はまさしく busyness の世界でもあるようだ。しかし、最近ではその一方で、余暇時間の確保・開発が声高に叫ばれるようになっている。時間の配分に関する問題は、就業時間においても余暇時間においても、大多数の人々が様々な形で日常的に直面している問題なのである。

情報化の進行は、確かに情報の伝達時間を革命的に短縮した。しかし、それに伴う新たな作業の発生、情報の氾濫、さらには逆説的な対面コミュニケーション

ンの重要性の拡大は、人々の時間配分をどのように変化させたのだろうか。ネットワーク型のワークステーションは、あるいはポケット・ベルや自動車電話は、就業時間中の人々の行動をどのように変えるのだろうか。

情報化はまた、経済活動を先頭とした日常生活全般の国際化を招き、それに伴って社会活動の24時間化、生活時間構造の多様化を引き起こした。CVS、ファミリーレストラン、テレビ放送、六本木に代表される「盛り場」、さらには、需要と供給のアンバランスの下で激烈な生活をプログラマーに強いるソフトウェア開発、ディーラーが自宅にまでテレレート端末を持ち込むほど世界市場化した金融、等々、社会の様々な側面における24時間化は、サービスを供給する側・消費する側を問わず、どのような生活時間構造を持つ人々によって支えられているのであろうか。

また、市場／消費者として捉えたときに、そうした人々はマス＝「普通の消費者」に対して圧倒的なマイノリティなのだろうか、今はともかく将来はどうなるのだろうか。消費者のセグメントとしての意味のある存在なのだろうか。また、社会の先端的な情報化とは無縁な人々の生活時間構造は、ほとんど変化していないのだろうか。そして、生活時間の構造は消費活動全般とどのように関係しているのだろうか。

これらの問いに答える用意は筆者にはない。しかし、明らかなことは、こうした問いかけが答えられるべき問いかけだということ、そして、こうした問いかけは次々と新たな疑問を投げかけてくるものだということである。

#### 注

- 1) 邦文では、以下で取り上げる櫛谷（1985a）のほか、小方（1983）などがある。
- 2) 櫛谷、1985、p51。
- 3) Hägerstrand(1975)はこうした基本的な諸条件を次のようにまとめている（櫛谷、1985a、p52の訳による）。
  1. 人間は分割できない。
  2. 人間の一生の長さは限られている。
  3. 人間が同時に2つ以上の仕事を行うには能力的限界がある。

4. すべての仕事は持続期間がある。
5. 空間内の移動は時間を消費する。
6. 空間の収容 (packing) 能力は限られている。
7. 地表空間の広さは限られている。
8. 現在の状況 (situation) は過去の状況に必然的に規定されている。
- 4) ダイアグラムという比喩は、時間地理学の表記法を説明する際によく使われるが、ヘーゲルストランドのこの講演では、ダイアグラムという言葉は用いられていない。
- 5) ここで、authority に「管理」という訳語が当てられるのは英語の表現としては regulation の方が適切であるという指摘があるためである。櫛谷、1985a、p18、参照。
- 6) このような制約の3類型を絶対視した上での議論は、相当の問題を含んでいる。例えば、タクシーを利用すれば迅速に移動でき到達可能な地点へ行くのに、手元に現金がないため徒歩で行かざるを得ないとしたら、これは能力の制約とも管理の制約とも見ることができはるである。ここで指摘された3類型は相互排他的なものでも網羅的なものでもないように思われる。
- 7) 杉浦、1985b、参照。
- 8) PESASP は1960年代後半に開発されたものらしく、1970年には、レントープによるスウェーデン語の論文が出ている。櫛谷、1985a、p54。
- 9) この論文の原稿はレントープがスウェーデン語で執筆したものであるが、収録されているのはカールスタインの翻訳による英語版である。この論文は図表の説明などに不十分なところが目立つが、こうした事情も働いているのかもしれない。
- 10) 午後から出勤するという仮定は奇異なものと思われるが、これが午前中に勤務しないことを意味するのか、昼食に帰宅することを意味するのかは不明である。
- 11) ただし、これは PESASP モデルにはそうした要素を盛り込めることを説明しているだけで、オレブプロの事例については道路・時間帯別による速度の違いは考慮されていない。
- 12) これも注11同様、ここでは簡略化されているようである。
- 13) 高阪、1985、pp248~249。/杉浦、1985a、pp98~99。
- 14) 保育園は住宅地に設けるよりも、就業地周辺に開設した方が、女性の就労機会を増やすことになる、という結論は、後述する Pred & Palm (1978) でも指摘されている (p104)。
- 15) スウェーデンの社会においては、労働時間が短かく、また男女平等思想が普及し、夫婦共働きも多いことから、退勤後の家庭生活に対する執着は強いといわれる。
- 16) もちろん、より事実即して考えるならば、PESASP は1960年代からヘーゲルストランド自身も含めたレント学派の共同作業の中から形成されたものと見るべきであろう。
- 17) これらの分野は、ブレットによって、既に研究例があると判断された分野である。
- 18) このような考え方は、人文主義地理学のバティマーらが提唱する長老地理学者へのインタビュー収集という活動と無関係ではないだろう。竹内、1986、pp313~315、参照。
- 19) ここで用いる(A)・(B)・(C)の記号は便宜上筆者が付したものであり、櫛谷の原文にはない。

- 20) ただし、地理学への構造化理論の導入は、時間地理学とは別にグレゴリーが歴史地理学の実証研究に持ち込んだのが先であるという。櫛谷、1985a、pp547~548。
- 21) 人文地理学会の1987年度大会 (関西大学) 地理思想研究部会において櫛谷は「低湿地農民の稲作の時空間—戦前の信濃川下流部 (亀田郷) を例に」と題する発表を行っている。ただし、部会発表なので「研究発表要旨集」に要旨は収録されていない。研究部会要旨は『人文地理』に近く掲載される予定である。
- 22) この修士論文は、東京大学理学部地理学教室 (本郷) および教養学部人文地理学教室 (駒場) に収蔵されている。
- 23) 行動地理学については差し当たり、若林 (1985) を参照されたい。
- 24) 荒井良雄はじめ、主として消費者行動論に取り組んできた地理学の若手研究者の勉強会であり、近く、時間地理学のリーディングスを刊行する予定である。
- 25) 荒井の発言による。
- 26) この論文の翻訳は上記 (注24) のリーディングスに収録される。
- 27) こうした問題意識の背景には、女性も男性と同じ条件で働く権利があるという徹底した考え方がある。『TIME』誌の最近の記事によると、男女平等思想の普及しているアメリカ合衆国においては、夫婦共働きの比率は夫婦全体の56%を占め、また、双方の仕事の事情で別居を強いられている夫婦が70万組もあるという。Toufexis、1987、参照。
- 28) この論文は教科書的文献の一部であるため研究の手続きについての説明が省略されているとも考えられる。別に未公開の論文があるものと思われる。
- 29) 文中で見える限り、クレイグの人口は示されていない。ベオニアの人口は、1977年現在で1276人である。
- 30) cを省いたのは、差し当たり応用の方向が見つからなかったからである。cのタイプの研究は、歴史地理学的研究が主であることや、しばしば極めて難解なことから、筆者の手に余ったというのが正直なところである。
- 31) 時間地理学の研究者に女性が多いこと (本文中に名を挙げた研究者を見ても Mårtensson、Palm と2人もいる) や、例えば Pred (1981) が文中で、中性的であるはずの a person の所有格を her で受けていたりする、といったエピソードも時間地理学のテーマが日常生活に制約条件の大きい女性の問題を取り上げることが多いことと無関係ではないかもしれない。
- 32) 『アクロス』的な議論の仕方は当然多くの問題を含んでいる。しかし、そこではティーンエージャーや在日外国人といったイメージを媒介として先端的な消費者の姿を探ろうとする姿勢がある。
- 33) 高橋 (1987) は、「まず、time geography では、空間を三次元面で表し、これを垂直的な時間軸を加えると、ダイナミック・アップ (dynamic map) と呼ばれて三次元的に表現される」(p297) と表現法に限って時間地理学の業績に触れている。  
櫛谷 (1985a) も、高橋 (1987) に先行した高橋らの一連の研究について「もっともこれらは、観察された行動の表記のテクニクとして時間地理学を利用したもので

あって、行動自体をそれによって分析しようとの意図を含むものではないようである」(p534)と述べている。

- 34) この図を描く契機となったのは、オフィス・オートメーション学会第16回全国大会(1987年・早稲田大学)のパネル・ディスカッション「経営・生産システムの動向と課題」における、パネラー・小西一生(花王・システム開発部長)の発言であった。
- 35) 例えば、飯山市のようにスキー場近くの地場産業のスキー板製造業が立地している場合には、その製品を現地で買うパターンを開発することも考えられよう。

## 文 献

- Carlstein (1982): *Time resources, society and ecology*. George Allen & Unwin. [未見]
- Hägerstrand (1970): What about people in regional science?, *Pap. Reg. Sci. Assoc.*, 24, pp7-21
- Hägerstrand (1975): Space, time and human conditions. in Karlquist *et al.* eds.: *Dynamic allocation of urban space*. Saxon House, pp11-12.
- 広松 悟(1986):『東京の都市周辺地域における生活空間の変容』, 東京大学大学院理学系修士論文(東京大学教養学部人文地理学教室蔵)。
- 高阪宏行(1985):「都市に関する行動モデル論(d. 時間地理学)」, 田辺・渡辺編『総観地理学講座16・都市地理学』, 朝倉書店, pp233-251.
- 柳谷圭司(1985a):「時間地理学研究の動向」, 人文地理, 37, pp533-551.
- 柳谷圭司(1985b):「時間地理学(Time-Geography)の内房漁師の行動選択の解釈への応用」, 地理学評論, 58, pp645-662.
- Lenntorp (1978): A time-geographic simulation model of individual activity programmes. in Carlstein, Parkes, & Thrift eds.: *Timing space and spacing time*, vol. 2. Arnold, pp162-180.
- Mårtensson (1979): On the formation of biography in space-time environment. *Lund Studies in Geography Ser. B*, 47, 175p. [未見]
- 小方 登(1983):「移動=活動パターン分析の視点(3. 移動=活動パターンにおける制約)」, 京都大学文学部地理学教室編『空間・景観・イメージ』, 地人書房, pp78-93.
- Palm (1981): Women in nonmetropolitan areas. *Environment & Planning A*, 13, pp 373-378.
- Palm & Pred (1978): The status of American women. in Lanegraw & Palm eds.: *Invitation to geography*. McGraw-Hill, pp99-109.
- Pred (1973): Urbanisation, domestic planning problems and Swedish geographic research. in Board *et al.* eds.: *Progress in Geography 5*. Arnold, pp1-76.
- Pred (1977): The choreography of existence: comments on Hägerstrand's time-geography and its usefulness. *Econ. Geogr.*, 53, pp207-221.
- Pred (1981): Social reproduction and the time-geography of everyday life. *Geografiska*

*Annaler*, 63B, pp5-22.

- 杉浦芳夫(1985a):「タイムジオグラフィー(Time-geography)」, 坂本・浜谷編『最近の地理学』, 大明堂, pp94-101.
- 杉浦芳夫(1985b):「Hägerstrand 地理学の源流を求めて」, 人文地理, 37, p478-479.
- 高橋伸夫(1987):「日本の生活空間にみられる時空間行動に関する一考察」, 人文地理, 36, pp295-318.
- 竹内啓一(1986):「地理学者の夢と現実」, 一橋論叢, 95, pp311-326.
- Toufexis (1987): Dual Careers, Doleful Dilemmas: When husband and wife work, whose ambitions comes first? *Time*, Nov. 16th 1987, pp60-61.
- 若林芳樹(1985):「行動地理学の現状と問題点」, 人文地理, 37, pp153-155.

## 謝辞

本稿執筆に際し、荒井良雄先生(信州大学経済学部)、川口太郎先生(東京大学理学部)、岡本耕平氏(名古屋大学大学院)、神谷浩夫氏(日本学術振興会特別研究員)ほか時間地理学研究会の方々には多くのことを御教示頂いた。特に文献の選択、入手は、荒井・川口両先生の全面的な御協力と御助言があって初めて可能となった。

川嶋行彦先生(東京国際大学商学部)には、本研究に激励と、マーケティング・サイエンス学会の消費者行動モデル研究会(1987年2月)および高岡大会(1987年11月)での発表の機会を与えて頂いた。それぞれの発表の場において多くの方々から貴重なコメントを頂戴したことは本稿執筆の励みとなった。

以上、記して各位に感謝の意を表する。